

園林の「小空間」——白居易詩文を中心として

二宮美那子

はじめに

中唐の詩人白居易は、日常生活の様々な題材を詩に詠うことによつて、文化史においても重要な役割を果たした。本論ではその中で特に、「園林」の詩人としての一面、すなわち、私的生活の場の構築を一生を通して詠い續けた詩人としての側面に焦点を當てる。

白居易は閑適詩の確立によつて仕官と隱逸との矛盾を解消し、士大夫の「隱逸」に晝期をもたらした。閑適詩の特徴の一つが、細やかな生活の描寫である。その主要な舞臺となつたのが、江州の廬山草堂や洛陽履道里の私邸を代表とする私的生活の場（園林）であつた。白居易は轉居のたびに住まいを描く夥しい作品を残したが、これらは閑適詩成立に缺くべからざる役割を果たしている。

白居易の住まいをめぐる作品については、その意義や時代による變遷、また先だつ詩人との繼承關係など、既に多くの研究の蓄積がある。本論では新たに、園林が唐代文學の中でいかに詠われてきたかを検討し、「白居易に至るまで」の流れを探るところから論を始める。またその流れを承けて、白居易の園林空間を支える諸要素とその意義

について、改めて考察を加えたい。

一、唐代における園林詩の流れ

①「園林」とその文學

論を始めるに當たつて、「園林」とその文學について簡単に觸れておきたい。^①園林という言葉は、中國現代語及び古典で用いられるごく普通の語であり、また「園林研究」も近代的研究分野として早くから存在する。ただし、これを日本語の「庭園」と全く同等のものともみならず違和感が生じる。園林史の先行文獻に明らかかなように、園林には、帝王の所有した廣大な苑囿、貴族や高官が集う別墅・別宅、隱者が棲む草堂や山居、山中の寺院、唐代長安の曲江池のような公共の遊覽場所、士大夫が暮らす都市の中の宅園、これら全てが含まれる。園林は遊興の場、鑑賞の對象としてだけでなく、隱逸文化と深く結びつき生活の場とも捉えられる。特に文學作品においては、退隱願望を始めたとした様々な意圖が働き、しばしば處世におけるもう一つの選擇肢として扱われる。園林とは、朝廷への仕官を「公」とした時の「私」的時間を過ごす場所、そしてそこには程度の差こそあれ人の手を經

た、精神を依託できる「山水」が存在する——大まかな定義ではあるが、まずはこのように考えることが出来る。

園林の示す範囲の廣範さに鑑みれば當然のことではあるが、文學作品に表される園林の姿は多様であり、また作品創作の場として重要な役割を果たしてきた。私的生活の場を詠うことは、仕隱の問題と直結する。時代と共に政治制度や文學の主要な擔い手が變化しても、隱逸や隱者に對する憧憬、仕隱の矛盾は文學の一大命題であり續けた。言志の文學と社交の文學、いずれの流れを汲むかを問わず、園林は、これらの憧憬や矛盾を喚起し、それを容れる重要な場として働いてきたのである。特に士大夫にとつて、園林は仕官との緊張状態の中で成立する場であるとも言え、そのありようは傳統中國の社會構造を反映していると言え言うことができる。

園林の語が指し示すものの廣範さと、文學に表される際の多様性、この二つが重なり合つて、「園林の文學」はその範圍を定めるのが困難なほどだ。例えば、先行研究でも指摘される唐代園林の呼稱の多様さは、園林がいかにか恣意的に捉えられるかを端的に示す例として興味深い。また、文學そのものには當然固有の流れがあり——例えば「居」を詠う作品、あるいは公宴詩や山水詩といったそれ自體傳統をもつジャンル——園林はその流れを支える脇役、時には主役として、多様な役割を擔つてきた。

以下に續く第二節では、このような園林の文學の中から、自身が所有する場所、歸屬する場所において、權力の場から距離を置いたからこそ抱ける個人の思いを詠う唐代の詩文を取り上げる。曖昧で廣範に過ぎる定義のようだが、唐詩の中にはこの系統に屬する作品の流れを確かに確認できる。

②白居易以前の園林空間

白居易は、官歴の始めの長安の貸家住まいに始まり、江州廬山草堂・洛陽履道里邸はもちろんのこと、下邳での服喪期間、外任期（忠州・杭州・蘇州）の官舎など、あらゆる場所で私生活をつぶさに描き、またそこでの感慨を詠った。白居易ほど私生活の場に拘った詩人は唐代に類を見ないが、一方で、白居易以前の士大夫たちが官から離れた私の思い——端的に言う、棄官隱逸をめぐる感慨——を表白する場をもたなかったというわけでは、もちろんない。彼らが仕官の軛から逃れて自己を回復する場は、多く「山林」の代替としての別墅や別莊であつた。

唐代士大夫にとつて別墅や別莊は、仕官の緊張から解放される場、友好的で美しい自然に圍まれた安息の地であつた。また、それらの多くは經濟的な支えを擔う莊園としての役割をももつていた。ここで詩人たちは、時に陶淵明以來の田園詩風の作品を作り、時に才を抱いて不遇をかこつ失意を詠った。周圍の山水は彼らの心を慰め、ひとときの間自由に生きる隱者としての境地を與えた。盛唐の王維の輞川莊、中晩唐の李德裕の平泉莊は、このような別墅・別莊の代表的な例である。以下この節では、別墅や別莊が唐代にどのように詠われたのかをみていきたい。次に擧げるのは初唐の詩人宋之問の作品である。

陸渾山莊 陸渾の山莊

歸來物外情 歸來 物外の情あり

負杖闔岩耕 杖を負いて岩耕を闔す

源水看花入 源水 花を看て入り

幽林採藥行 幽林 藥を採りて行く

野人相問姓 野人 姓を相い問ひ

山鳥自呼名 山鳥 自ら名を呼ぶ
去去獨吾樂 去り去りて獨り吾れ樂しまん
無能愧此生 無能 此の生を愧ず

〔宋之問集〕卷下

陸渾は河南府伊闕縣にある山名。作品は休暇の折に所有する山莊を訪れた際のものと思しい。第一句目、山莊に歸つてからの「物外の情」というのは、仕官から解放された山水の中で湧き起こる興趣を言う。桃花源へと誘う「源水」では花に導かれ、ひっそりとした林で藥を採る。「野人」は農夫や木こりを言うものだろうか、彼らと氣さくに名字を呼び合つて會話し、山鳥はその名の通りの鳴き聲を響かせ。山莊では周圍の自然や人が詩人に好意的に働きかける。暢びやかな暮らしを描いた作品は、最終句に「無能 此の生を愧ず」と慚愧の念を吐露しつつも、悲觀的な方向には傾かない。

次の陳子昂の作品は、思索の場としての園林を描いたものである。

南山家園林木交映盛夏五月幽然清涼獨坐思遠率成十韻

南山の家園林木交ごも映じ、盛夏五月幽然として清涼なり、獨坐して遠きを思い、率として十韻成る

寂寥守窮巷 寂寥 窮巷を守り
幽獨臥空林 幽獨 空林に臥す
松竹生虛白 松竹 虛白を生じ
階庭懷古今 階庭 古今を懷く
鬱蒸炎夏晚 鬱蒸たり炎夏の晚
棟宇闕清陰 棟宇 清陰を闕す
軒窗交紫靄 軒窗 紫靄を交え
簷戸對蒼岑 簷戸 蒼岑に對す

園林の「小空間」

鳳蘊仙人籙 鳳は仙人の籙を蘊え
鸞歌素女琴 鸞は素女の琴に歌う
忘機委人代 機を忘れて人代を委す
閉牖察天心 牖を閉ざして天心を察す
蛺蝶憐紅藥 蛺蝶 紅藥を憐れみ
蜻蜒愛碧澗 蜻蜒 碧澗を愛す
坐觀萬象化 坐して觀る萬象の化するを
方見百年侵 方に見る百年の侵すを
擾擾將何息 擾擾として將に何くにか息まんとす
青青長苦吟 青青として長く苦吟す
願隨白雲駕 願わくは白雲の駕に隨いて
龍鶴相招尋 龍鶴 相い招尋せん

〔陳伯玉文集〕卷二

作品は、職を辭して故郷に歸つた聖歷元年（六九八）以降に作られたとされる。「家園」、つまり一族の所有する別墅で詠まれたもの。

一、二句目、「守窮巷」「臥幽林」の語が行き詰まり孤獨をかこつ詩人の姿を浮かび上がらせる。庭の松竹によつて清らかな心境が導かれ、前庭に續く階を眺めて古今に思いを馳せる。四句目の「懷古今」は、『文苑英華』卷三百十七などでは「橫古今」に作り、左思「招隱士」〔文選〕卷二十二の「杖策招隱士、荒塗橫古今（杖策 隱士を招き、荒塗 古今に横たう）」と重なる。左思の詩では隱者のいる異空間へ足を踏み入れるのだが、この詩では靜止した作者の眼前に時空の廣がりが生み出される。五、六句目、眞夏の熱氣から隔てられた屋内は靜謐な別天地、窓や戸は仙界の氣配を帯びた外界に接する。續く「鳳」と「鸞」は屋内の何らかの裝飾を言うものだろうか。この聯により詩は

八九

仙界へと一足飛びに踏み出し、更に轉じて自身の内面へと目が向けられる。「人代」は人の世。たくらみを忘れて人の世を捨て去るという達觀を示す一方で、窓を閉ざして天の心を察する^⑤という能動的な精神の深まりを言う。「蛺蝶」や「蜻蛉」が花や水と戯れるいかにも「家園」に相應しい可憐な情景——色彩の鮮やかさはやはり仙界の雰圍氣を感じさせる——をはさみ、詩は己と萬象とが對峙するスケールの大ききを見せる。時の流れの果てのなさに倦み疲れ、苦吟の辛さを述べた上、昇仙への憧れで作品は結ばれる。

作品には「松竹」「階庭」「棟宇」「軒窗」「簷戸」など家園の様々な部分が點綴される。閉ざされた空間の中、「獨座」の靜觀の内にありながら、詩は作者の精神の廣がりと呼應して、時空を越えた廣がりを見せる。陳子昂の作品からは、文學の場、思索の場としての別墅・別業のあり方を見ることが出来る。

洛陽近郊の陸渾にて休暇の折に作られたと思しい宋之間の作品と、失意の歸郷の後作られた陳子昂の作品とは、心情に大きな隔たりがある。別墅・別業の設けられた場所や、休暇か左遷か、あるいは仕官に出る前かなどによつて、作品の雰圍氣はそれぞれに異なっている。しかし、別墅・別業という場を意識して作られた作品は、いずれも仕官と隱逸を二者擇一とした上で、官界に背を向けて書かれるという枠組みをもつ點では共通している。

仕官隱逸を二者擇一とする場においては、兩者の矛盾が浮き彫りになり、そこから逃れることは難しい。このような矛盾を典型的に示す例が、時代は降るが中晩唐の政治家李德裕が別墅平泉莊を描いた作品である^⑦。開成元年（八三三）、太子賓客分司東都となり、洛陽近郊の平泉莊に滞在した際の作品「潭上喜見新月（潭上にて新月を見るを喜ぶ）」

の冒頭にはこうある。

簪組十年夢 簪組 十年の夢
園廬今夕情 園廬 今夕の情

（『李文饒別集』卷十）

句からは、官界（「簪組」と別墅「園廬」）が、一方が現實となれば他方が夢となる、表裏一體の關係になっていることが讀み取れる。李德裕は官僚としての自己を捨て去ることはできず、思慕して止まなかつた平泉での安穩な引退の夢は、ついで叶うことがなかつた。彼と園林との關係は、次章で取り上げる白居易のあり方と好對照をなしている。南宋の陸游は兩者を取り上げ「樂天 十年 履道の宅、贊皇 一夕 平泉莊」（題閩郎中深水東臯亭詩）と詠った。十年の長きにわたつて履道里で晩年を過ごした白居易と、たつた「一夕」の閒しか平泉莊で過ごすことができなかつた李德裕、このような兩者の違いは、そのまま二人の隱逸觀の違いを反映している。

二、白居易の園林を支えるもの

前章に見たように、初盛唐の別墅・別業を詠う作品は、官を一方に置いた上で「隱逸」の場として描かれるという枠組みをもつていた。一方白居易は、彼の隱逸觀を表す代表作「中隱」（227・卷五十二）「不如作中隱、隱在留司官。似出復似處、非忙亦非閑（如かず中隱と作りて、隱れて留司の官に在るに。出ずるに似て復た處るに似、忙に非ずして亦た閑に非ず）」にも典型的に表れているように、仕官と隱逸に中間地點を設けることで對立を解消させ、私人としての生活の充實を描いた。本章では、このような白居易の個人空間を支える意識とは何かを考えてみたい。

①都市の詩人

血統や家門になんらの保証ももたない若者たちが、自身の才覚を頼りに長安に出たとき、そこに従來の都を描く文學とは異なる作品が生まれた。白居易について言えば、川合康三氏「長安に出て来た白居易」に指摘されるように、大都會長安に出て間もない時には孤獨感と鬱屈を示す作品を詠んでいる（「長安正月十五日」詩（OGG・卷十三）「誼誼車騎帝王州、羈病無心逐勝遊。明月春風三五夜、萬人行樂一人愁。誼誼たる車騎 帝王の州、羈病 心の勝遊を逐う無し。明月春風三五の夜、萬人行樂するも一人愁う」など）。しかしその鬱屈は、官位を得て生活の基盤を得ることで變化し、都市の中で己の居場所を見つけ、表現する方向へと向かう。川合氏はその重要な轉機として閑適の發見を挙げ、『白氏文集』「閑適」の冒頭に置かれた「常樂里閑居……」詩を詳細に分析し、「閑適を獲得することによって、長安の中で住みうる己れが回復される」（三六六頁）と指摘される。

これを別の角度から見れば、大都市長安と詩人とが對峙することによって「閑適」の發見が促された、とも言うことができる。「己れを回復する」手段が生活の細部の描寫に向かうのは、白居易という詩人の資質によるところが大きいだろう。長安での生活の充實は、都市が與える様々な壓力に對して、自らの領域を擴大させていく過程のようにも見える。長安を自身が確かに生活する場として捉え直した白居易は、友人たちとの交流や長安の文化風俗にまで及ぶ多數の作品を残した。これらは當時の都市生活を知るための貴重な資料となっている。

大都市長安との對峙をきっかけとして育まれた「閑適」の境地、それを支える日常生活への細やかな關心が、都市の中で私の空間を描く一つの契機となっている。こうして、わざわざ郊外や山中に擬似的隱

逸空間を求めずとも、自分がいるその場所に自適の空間を築く道が拓かれた。その後白居易は、官位を上るに從つて自身の望む環境を手に入れ、最終的には洛陽で集大成としての自適の空間を完成させる。その最初の一步が、官僚として駆け出しの頃、都市でようやく自分の居場所を手に入れた時に既に踏み出されていたことは、十分に意識しておくべきであろう。

外的要因として、當時の長安城の住環境の發達にも觸れておきたい。妹尾達彦「唐長安城の官人居住地」¹⁵⁾は、唐代長安城の居宅分布の變化を時代に沿つて分析する。妹尾氏によると、安史の亂後、長安城の街東中部には上京した科擧出身者が集中する新興の住宅街が發達し、九世紀前半には高級邸宅街の様相を呈する。長安城の街東中部は、中唐の頃には社交にも遊興にも適した住みよい地域となつていた、¹⁶⁾と言う。白居易が住居を轉々とさせたのも、まさにこの長安城の街東中部であつた。更にもう一點指摘しておかねばならないのが、園林の空間藝術の發達である。¹⁷⁾都市の限りある空間の中で、植栽・治水・借景など様々な技術を駆使して「別天地」を造り出す技術は、これらを文學としてどう表現するかということも含めて、士大夫の個人空間を支える重要な要素であつた。造園を取り上げた作品を多く詠んだ白居易は、これらの園林藝術の第一の擔い手であつたと言える。

②山林と朝廷の間

長慶二年（八二二）、杭州刺史時代に作つた「郡亭」詩（OGG・卷八）では、杭州の郡亭（盧白亭）をこのように詠う。

山林太寂寞 山林 太だ寂寞たり
朝闕空喧煩 朝闕 空しく喧煩たり

唯茲郡閣内 唯だ茲の郡閣の内

囂靜得中間 囂靜 中間を得たり

また、會昌五年（八四五）、刑部尙書致仕後の洛陽履道里の自宅で作

つた「閑題家池寄王屋張道士（家池に閑題し王屋の張道士に寄す）」詩

（3534・卷六十九）にはこのような表現が見える。

進不趨要路 進みて要路に趨らず

退不入深山 退きて深山に入らず

深山太澗落 深山 太だ澗落たり

要路多險艱 要路 險艱多し

不如家池上 如かず家池の上

樂逸無憂患 逸を樂しみて憂患無きに

兩作品は、山林のわびしさと、朝闕や要路の喧騒と危うさを兩極として擧げ、杭州の亭臺と洛陽の家池をその中間にあるものとして肯定的に捉える。二つの極を擧げてそれらを否定し、中間こそが最も良いとする修辭は白居易得意のものであるが、このような心の持ち方は、今身をおく場所を肯定的に捉える際にも有効であった。洛陽で詠んだ「中隱」詩はその最たるもので、出處・忙閑・貴賤・窮通・豐約のいずれにおいても中間に位置するとして現状を肯定する。

ただし、このような捉え方が居所を肯定する際に一貫しているわけではない。長安昭國里の借家では、「勿嫌坊曲遠、近即多牽役。勿嫌祿俸薄、厚即多憂責。……何以養吾真、官閑居處僻（坊曲の遠きを嫌う勿れ、近ければ即ち牽役多し。祿俸の薄きを嫌う勿れ、厚ければ即ち憂責多し。……何を以て吾が真を養わん、官閑にして居處僻なり）」（昭國閑居」詩（0268・卷六）と、兩極の一方（近・厚）を否定することでもう一方（遠・薄）を肯定する。長安の自宅を詠う際には、その狭さを歎きつつ

も自身を容れる場がある幸運を詠う態度が目立つ（長安新昌里での「卜居」詩・「題新昌所居」詩など）。これらの例から、白居易が狀況に應じた措辭を驅使して現状の肯定に努めたことが読み取れる。

③居所と身心

白居易は自身の身心のありように敏感な詩人であった。元和三年（八〇八）、左拾遺・翰林學士の時に作られた以下の作品にもそれは表れている。第九句から二十句を擧げる。

夏日獨直寄蕭侍御 夏日獨直 蕭侍御に寄す（0193・卷五）

夏日獨上直 夏日 獨り直に上り

日長何所爲 日長くして何の爲す所ぞ

澹然無他念 澹然として他念無く

虛靜是吾師 虛靜 是れ吾が師なり

形委有事牽 形は事有るに委ねて牽かるるも

心與無事期 心は事無きと期す

中臆一以曠 中臆 一に以て曠く

外累都若遺 外累 都て遺るるが若し

地貴身不覺 地貴きも身覺えず

意閑境來隨 意閑にして境來りて隨う

但對松與竹 但だ松と竹とに對し

如在山中時 山中に在る時の如し……

作品は、宮仕えに縛られる「形（身體）」と、自由な「心」を對比する。内心が廣々としていけば煩わしい諸々は全て忘れてしまう。眼前の松竹に大自然を投影させ、山中の境地を見出す。軽いタッチで描かれた詩ではあるが、勤務中に得られた閑寂の境地を、身と心とを分

かつ理論的な捉え方で詠う點が興味深い。

白居易のこの作品は仕官する身と心とを分けて捉えるが、本来、仕隱の矛盾はしばしば内心と行動(形・迹)との衝突や葛藤と言う形で表されてきた。例えば、謝靈運が始寧に引退する際に書いた「初去郡(初めて郡を去る)」詩(『文選』卷二十六)では、これまでの仕官を振り返り、「顧己雖自許、心迹猶未并(己を顧みて自ら許すと雖も、心迹猶お未だ并ばず)」、心と行動の矛盾を表白する。また陶淵明「始作鎮軍參軍經曲阿作(始めて鎮軍參軍と作りて曲阿を経るの作)」(『文選』卷二十六)では、赴任途上の搖れ動く思いを詠って「眞想初在衿、誰謂形迹拘(眞想初めて衿に在り、誰か謂わん形迹拘わると)」と、本心と行爲との矛盾を釋明する。

人生の重要な節目に詠まれた謝靈運・陶淵明詩と白居易詩とは、詩作の構えにそもそも違いがあることには注意せねばならないが、白居易は「心」と「行爲」との矛盾を「心」と「身體」の問題として捉え直し、兩者を切り離すことでその矛盾をいとも簡単に飛び越えていることが分かる。妥協的な態度ととれなくもないが、ほとんどの士大夫にとつて棄官が現実的な選擇ではない以上、白居易のこのような捉え方は士大夫に自由を與え得る畫期的な發想と見ることが出来る。

あらゆる場所、状況下で身と心の適不適を意識する態度は、私的空間を確立させる際にも重要な役割を果たした。例えば、元和十二年(八一七)左遷先で江州司馬を務めていた際の、廬山草堂に題した有名な作品にはこうある。

重題 其二 重ねて題す 其三(978・卷十六)
日高睡足猶慵起 日高く睡り足りて猶お起くるに慵し
小閣重衾不怕寒 小閣 衾を重ねて寒きを怕れず

園林の「小空間」

遺愛寺鐘欹枕聽 遺愛寺の鐘は枕を欹てて聽き
香鑪峯雪撥簾看 香鑪峯の雪は簾を撥ねて看る

匡廬便是逃名地 匡廬は便是れ名を逃るるの地
司馬仍爲送老官 司馬は仍お老を送るの官爲り

心泰身寧是歸處 心泰く身寧ければ是れ歸處
故鄉可獨在長安 故鄉獨り長安にのみ在る可けんや

布團にくるまってまどろむ快樂を享受し、寢そべったままで目と耳とを樂しませる。名利を逃れる場所も、老いを送るための官位も揃った。くつろいだ生活と身心を充足させる環境を詠い、歸る場所はなにも長安だけという譯ではない、と詩を結ぶ。江州の次に赴任した忠州での作品「種桃杏(桃杏を種う)」(1130・卷十八)では、桃や杏が花をつけるまでの時間を忠州で過ごす時間に重ねるが、その冒頭ではこう言う。

無論海角與天涯 論ずる無し 海角と天涯と

大抵心安即是家 大抵 心安んずれば即ち是れ家なり

また、長安に戻ってから杭州刺史に赴任する際の作「初出城留別(初めて城を出て留別す)」(936・卷八)では、この先に待つ大きな環境の變化を受け止めながら、結句でこう詠う。

我生本無鄉 我が生 本より郷無く

心安是歸處 心安んずれば是れ歸處なり

晩年を過ごした洛陽履道里でも同様の表現が見える。大和五年(八三二)、河南尹の時に作られた「吾土(吾が土)」(989・卷五十八)である。

身心安處爲吾土 身心安んずる處 吾が土と爲す
豈限長安與洛陽 豈に長安と洛陽とに限らんや

九三

水竹花前謀活計 水竹花の前に活計を謀り

琴詩酒裏到家郷 琴詩酒の裏に家郷に到る……

先に引用した三首が多少なりとも自らを慰める口調を帯びていたのは異なり、洛陽で作られた「吾土」から読み取れるのは満ち足りた晩年を過ごす餘裕である。ここでは、左遷の地の不遇感を跳ね返す必要も、環境の變化への戸惑いを打ち消す必要も無い。その結果、「洛陽」や「長安」が代表する場所の價值付け、あるいは場所という概念自體が消失し、水竹花・琴詩酒の至境に遊ぶことができるのだ。

このように、心身の安定をよりどころとして歸屬意識を生み出す態度は、どこにでも安住の地を見出すしなやかな適應力の支えとなっていた。

④親愛なる伴侶

白居易は、住まいに不可缺の伴侶として様々なものを愛好し、彼らとの關係を繰り返し詩に詠った。例えば、長慶二年（八二二）、長安新昌里に住んでいた時に詠んだ「庭松」詩（0508・卷十一）では、自宅の庭の松に親しみを寄せ、後半ではこう詠う。

一家二十口 一家 二十口
 移轉就松來 移轉して 松に就きて來たり
 移來有何得 移り來りて 何の得る有らん
 但得煩襟開 但だ煩襟を開くを得たり
 即此是益友 即ち此れは是れ益友にして
 豈必交賢才 豈に必ずしも賢才に交わらんや
 顧我唯俗士 顧みるに我は唯だ俗士なるのみ
 冠帶走塵埃 冠帶もて塵埃に走る

未稱爲松主 未だ松の主爲るに稱わず
 時時一愧懷 時時 一たび愧懷す

白居易にとつて松や竹などの植物は單なる鑑賞物ではなく、白居易は彼らとの關係性をこそ大切にして詩に詠んだ。植物の移植を詠う作品を多く作り、自身が居る土地に根を張り生い茂る植物を心のよりどころとして語りかける姿勢にもそれは表れている。例えば藍屋縣尉時代にあつらえた竹林を詠う「新栽竹（新たに竹を栽う）」（0395・卷九）、下邳縣で松に相対して自身の老いを歎く「栽松二首（松を栽う二首）」（0480・0481・卷十）、忠州で桃李に別れを告げる「別種東坡花樹兩絶（東坡に種えし花樹に別る 兩絶）」（1177・1178・卷十八）などはその例である。植物は白居易にとつて、場所に親しみ、そこを自身の居場所にするための、大切な伴侶であつた。奇石もまた白居易の大切な友人であつた。次に擧げるのは蘇州刺史の時の作品である。

雙石 雙石（2206・卷五十一）
 蒼然兩片石 蒼然たり兩片の石
 厥狀恠且醜 厥の狀 恠にして且つ醜なり
 俗用無所堪 俗用 堪うる所無く
 時人嫌不取 時人 嫌いて取らず
 ……
 人皆有所好 人皆な好む所有り
 物各求其偶 物各おの其の偶を求む
 漸恐少年場 漸く恐る少年の場の
 不容垂白叟 垂白の叟を容れざるを
 迴頭問雙石 頭を迴らして雙石に問う

能伴老夫否 能く老夫に伴うや否や

石雖不能言 石 言う能わざると雖も

許我爲三友 我を許して三友と爲さん

老いゆく自分が他から顧みられなくなった時、「怪異」な石のみが自分を理解して寄り添ってくれる。同じ時期に作られた「蓮石」詩(2476・巻五十四)では、洛陽の自宅に青石と白蓮を持ち歸る際に、「心と物と相い隨う」、自分の心とこれらの物が寄り添い合う、と表現している。

奇石愛好は當時流行した趣味である。白居易はその流行の中心にいたが、自身はとりどりの石を蒐集して楽しむと言うよりは、石一つ一つと一對一の親密な関係を結ぼうとした。引用した「雙石」詩で言えば、「俗用」にそぐわず「時人」に相手にされない奇怪な形状に自分には分かりえない価値を見出し、親しみと共感を寄せている。

園林の構成要素に對する親愛の情は、しばしば對象の擬人化として表現され、時にはそれが園林全體の擬人化にも及んだ。以下に引用する「答林泉(林泉に答う)」(2567・巻五十五)は、大和二年(八二八)、長安で秘書監を務めていた時、洛陽に使いして歸る際に詠んだ作品とされる。

好住舊林泉 好住なれ舊林泉

廻頭一悵然 頭を廻らして一たび悵然たり

漸知吾潦倒 漸く知る吾れ潦倒たるを

深愧爾留連 深く愧ず爾の留連するに……

作品は、これに先だつて作られた「洛下諸客就宅相送偶題西亭(洛下諸客宅に就きて相い送る 偶たま西亭に題す)」詩(2506・巻五十五)の「林泉應問我、不任意如何(林泉應に我に問うべし、住まざるの意は如

何)」に答えるもの。白居易は他の作品でも園林の擬人化を用いており(代林園戲贈・戲答林園・重戲答)、遊興の場での趣向として好んで用いたことが窺える。園林の擬人化は、松・石・蓮・鶴などの園林に集う伴侶たちに對する愛着の延長線上にある。日常生活に寄り添うこれらの伴侶たちによって、園林の内部は一層充實し、外界に對抗しうる獨立性を獲得していった。

愛するものがびったりと身の傍らにあること、親密で調和した空間を作ること、そのような感覚に白居易は敏感であった。園林の構成要素に對する時以外にもそれは表れている。江州刺史の任期を終えて洛陽に歸る途上の作「自餘杭歸宿淮口作(餘杭より歸りて淮口に宿るの作)」(2376・巻八)では、「妻子在我前、琴書在我側。此外吾不知、於焉心自得(妻子 我が前に在り、琴書 我が側に在り。此の外 吾れ知らず、焉に於いて心自得す)」と妻子と琴書が身近に寄り添うことを喜んでいる¹⁹⁾。

三、充足と遮斷——閉ざされる小空間

以上に述べてきた様々な要素を背景として、白居易の個人空間は、時代を経るごとにその密度を濃くし、調和と親密さの内に一種閉鎖的な様相を呈するようになる。この節では、白居易の「小空間」に關する言及を、時代を追って見ていきたい。

まずは、元和三年(八〇八)、翰林學士の時に長安新昌里の書齋を詠んだ「松齋自題(松齋 自ら題す)」(1190・巻五)の一部を擧げる。この時の住居は貸家であった。

才小分易足 才小にして分足り易く
心寬體長舒 心寬にして體長に舒ぶ

充腸皆美食

腸を充たすは皆な美食

容膝即安居

膝を容るれば即ち安居

況此松齋下

況んや此の松齋の下

一琴數帙書

一琴 數帙の書あるをや

書不求甚解

書は甚だしくは解するを求めず

琴聊以自娛

琴は聊か以て自ら娛しむ

作品は陶淵明詩を踏まえ、自適の書齋空間を詠う。引用一句目と四句目、「分足り易」い口の「容膝」の場、と言うのは、小さくまとまった空間への志向を、既に初歩的な形で示している。

次に元和十五年（八二〇）、忠州刺史時代に詠んだ「我身（我が身）」（0546・卷十一）の後半部分を挙げる。

賦命有厚薄

命を賦して厚薄有り

委心任窮通

心を委ねて窮通に任す

通當爲大鵬

通ずれば當に大鵬と爲り

舉翅摩蒼穹

翅を舉げて蒼穹を摩すべし

窮則爲鷓鴣

窮すれば則ち鷓鴣と爲り

一枝足自容

一枝 自ら容るるに足る

苟知此道者

苟くも此の道を知る者

身窮心不窮

身窮すれど心は窮せず

作品は出處進退について観念的に詠うもので、居宅を描いたわけではないが、ここにも「小空間」へと回歸する思想が読み取れる。引用を省略した前半では、意氣盛んだった過去と落魄して地方官となった現在を對比させて歎く。引用した後半では悲嘆から轉じ、自身の心中に目を向ける。行き詰まった時でも分相應の環境に身を委ねれば、心まで窮することはない。「窮・通」と言えば、『孟子』の獨善と兼濟を想

起させる、白居易にとつては重要な概念である。ここではそれを『莊子』に基づいた「我が身」を容れる場所と結びつける。先に引用した「松齋自題」で描かれるのは衣食住を満たした隱逸空間であり、「我が身」詩では窮した時の避難場所という違いはあるが、小さな空間内の安住を求める點で、兩者は共通している。

長慶元年（八二二）から二年、長安新昌里の自宅で描かれた作品には以下のように言う。

翫松竹二首

其一

松竹を翫ぶ二首 其の一（0574・卷十一）

龍蛇隱大澤

龍蛇

大澤に隱れ

麋鹿遊豐草

麋鹿

豐草に遊ぶ

栖鳳安於梧

栖鳳

梧に安んじ

潛魚樂於藻

潛魚

藻に樂しむ

吾亦愛吾廬

吾れも亦た吾が廬を愛し

廬中樂吾道

廬中

吾が道を樂しむ

前松後脩竹

前の松

後ろの脩竹

偃臥可終老

偃臥して老いを終う可し

各附其所安

各おの其の安んずる所に付き

不知他物好

他物の好きを知らず

龍蛇・麋鹿・鳳・魚が自らの性に從つて安らぎ樂しむように、自分自身もこの廬で我が道を樂しもう。各々がその性質にびつたりと合う場所におれば、他の良さなど知らないままで構わない。動物たちのすみかと同列に並べられる「小空間」は、自然體のままに樂しみ、老いを全うする場所である。作品には、自適の場に安住し外界には無關心という、内向きの態度がはつきりと示される。同様の傾向は、洛陽時代の作品には複数見出せる。以下に挙げるのは、「春葺新居（春に新居を

葺す」(0339・巻八)の後半部分。

尋芳弄水坐 芳を尋ねて水を弄して坐し
盡日心熙熙 盡日 心熙熙たり
一物苟可適 一物 苟くも適う可くんば
萬縁都若遺 萬縁 都て遺るるが若し
設如宅門外 設如 宅門の外
有事吾不知 事有れども吾れ知らず

作品は、洛陽時代の初期に當たる太子左庶子分司の時のものとされる。省略した前半部分では、江州・忠州時代の仮寓で植樹に勵んだことを振り返り、新居で庭造りにいそしむ喜びをかみしめる。庭園で過ごす満ち足りた時間に、他の全ては忘れてしまう。門の外で何があつたとしても自分には關わりない、と作品は結ばれる。門内の充實と外界への無關心との鮮明な對比が印象的である。もう一例、洛陽時代の後期に當たる太子賓客分司の時に作られた「詠興五首 四月池水満」(詠興五首 四月池水満) (3959・巻六十二)では、こう言う。

四月池水満 四月 池水満ち
龜游魚躍出 龜游びて魚躍出す
吾亦愛吾池 吾れ亦た吾が池を愛し
池邊開一室 池邊 一室を開く
人魚雖異族 人魚 族を異にすと雖も
其樂歸於一 其の樂は一に歸す
且與爾爲徒 且く爾と徒と爲り
逍遙同過日 逍遙として日に過ぐさん
爾無羨滄海 爾 滄海を羨むこと無く
蒲藻可委質 蒲藻 質を委ぬ可し

園林の「小空間」

吾亦忘青雲 吾れ亦た青雲を忘れ
衡茅足容膝 衡茅 膝を容るるに足る
況吾與爾輩 況んや吾れと爾の輩とは
本非蛟龍疋 本より蛟龍の疋に非ず
假如雲雨來 假如 雲雨來るも
祗是池中物 祗だ是れ池中の物なり

龜や魚とは族を異にしてもその樂しみは同じと言うのは、長安での「松竹を翫ぶ」と同じ發想である。この詩では眼前の龜や魚に語りかけ、より暢びやかな調子がある。『三國志』の「池中物」をふまえた最後の二聯は、自分と龜や魚とを同類として池中に竝べ入れてしまふ。作品の末尾からは、あるいは晩年の白居易の官界への思いを讀み取ることも可能かもしれないが、その詠いぶりはあくまでも悠々としている。

洛陽で書かれた晩年の作品では、今擱んだささやかな幸せにひたり、自宅の外の世界への無關心を詠う。この無關心は、自宅での充實——引用二首で言えば、自身が手入れた庭園の池邊で過ごす喜び——という裏付けがあつてこそ可能になるものだ。「容膝」「吾廬」などと呼ばれる白居易の「小空間」は、内部の充實によつて一層強固なものとなる。「松齋自題」に見られた隱者に擬する態度や、「我が身」に見られた「窮・通」の二項對立を提示する過程は、洛陽の諸作品にはもはや不要となつてゐる。外の世界に對抗しようとする意識は消滅し、衣食住の充實も敢えて口にするまでもない。

以上に見てきたような、洛陽時代における個人空間の内的充實と外界の遮斷は、實は長い洛陽時代の初期に既に宣言されている。大和三年(八二九)、太子賓客分司に赴任した時の「池上篇并序」(3928・巻

六十)がそれである。韻文部分を以下に引用する。

十畝之宅	十畝の宅
五畝の園	五畝の園
有水一池	水の一池有り
有竹千竿	竹の千竿有り
勿謂土狹	土の狹きを謂う勿れ
勿謂地偏	地の偏なるを謂う勿れ
足以容膝	以て膝を容るるに足り
足以息肩	以て肩を息むるに足り
有堂有亭	堂有り亭有り
有橋有船	橋有り船有り
有書有酒	書有り酒有り
有歌有絃	歌有り絃有り
有叟在中	叟の中に在る有り
白鬚飄然	白鬚飄然たり
識分知足	分を識り足るを知り
外無求焉	外に求むる無し
如鳥擇木	鳥の如く木を擇びて
姑務巢安	姑く巢の安らかなるに務む
如鼃居坎	鼃 <small>あ</small> の如く坎に居りて
不知海寬	海の寬きを知らず
靈鶴怪石	靈鶴怪石
紫菱白蓮	紫菱白蓮
皆吾所好	皆な吾れの好む所
盡在我前	盡く我が前に在り

時引一杯	時に一杯を引き
或吟一篇	或いは一篇を吟ず
妻孥熙熙	妻孥 熙熙たり
雞犬閑閑	雞犬 閑閑たり
優哉游哉	優なるかな游なるかな
吾將終老乎其間	吾れ將に老いを其の間に終えんとす

狭くて邊鄙な場所にある宅園だが、膝を容れ、肩を休ませるには十分だ。その中には、堂・亭・橋・船・書・酒・歌・弦樂が揃い、またそこにいるのは足ることを知る翁。鳥のように止まり木を選んで巢を整え、鼃のように穴にいて海の廣さを知らない。我が前にあるのは鶴・石・菱・蓮と自分が好んだ物ばかり。妻子や雞、犬たちものんびりと樂しそう。この自由と喜びの中で、これから先の老いを過ごそう。

「池上」と表現される洛陽の宅園は、鳥の巢や蛙の穴に喩えられる。それは、ちっぽけで閉ざされてはいるが「分相應」で、必要な物は全て揃った心身共に安心できる場所である。この「池上篇」では、引用では省略した長い序文も含めて、いわゆる「外界」——仕官への望みや、権力・富貴などの世俗的價值観による世界——には全く言及しない。白居易はこの作品で、恐らく自覺的に外界と干渉のない空間を作り出している。そして、その内部を十全に充實させることによつて、一種の理想郷を築き上げているのだ。作品中には自身が手に入れた様々なものが羅列され、それらが全て身の回りであることが喜びをもつて詠われる。ものの羅列は、一見單純な物質的快樂を求めたようにも映る。しかし、第二章第四節で見たように、白居易にとってほそれら一つ一つが自らと心を通わせる大切な伴侶であり、その場所に血を通わせるために缺かせないものであった。そして白居易は、これら

の主人として君臨する譯ではなく、彼らと自分とをひとしなみに池の畔に竝べ入れてしまうのである²²⁾。

何らかの危機に直面した時、あるいは周囲の状況と自身の生き方がちぐはぐになった時に、自らの據り所として閉鎖的な「小空間」を求め、外界との接觸を断つというのは、處世の一つのありかたとして理解できる。これを文學作品のテーマとして展開した恐らく初めての例は、庾信の「小園賦」であろう²³⁾。白居易の履道里邸もこのような思想の延長線にあるものだが、白居易の「小空間」は、自身の楽しみに没入することで外界を遮断する自適の住まいとして築かれている。洛陽で完成した白居易の「小空間」は、危機意識や不遇感などの切迫した感情を一切見せず、餘裕をもって外界を遮断するのだ²⁴⁾。

結び

初盛唐における別墅や別荘での作品は、仕官隠逸の二者擇一を前提とし、故に兩者の矛盾が常につきまとった。中唐の白居易は閑適詩の中で、都市のただ中を含めたあらゆる場所で私的生活を描き、個人空間を山林から都市へ移すことを可能にした。都市の生活空間が、人里離れた山林の代替としての機能をもち得るようになったのである。

身と心を切り離して捉え、心さえ「適」であればいずも安住の地になりうるという白居易の考え方は、いかなる状況下にあつても自足の空間を生み出す源となった。また、空間の構成要素それぞれとの親密で對等な關係は、充足した個人空間を築く上での支えであつた。白居易の個人空間は、自身が手鹽にかけた竹林・小池・庭園や集めた奇石・鶴・植物など、「性相い近き」(「翫松竹二首 其二」) 伴侶に圍まれることで完成する。

園林の「小空間」

このような個人空間は、内的充足が進むにつれ、自らを進んで他から遮断する、強固な「小空間」へと變質していく。洛陽で最終的な成就を見た白居易の園林は、士大夫の私的空間を擴張する様々な要素を提示した點で、畫期的な意義をもつと言える。

注

- (1) 日本國內では園林研究の分野を「造園・庭園研究」と稱することが通例となつているが、本節で以下に述べるように、「造園・庭園」の語が一般に想起させるものと、本論が對象とする文學における唐代園林の姿とはずれがある。このため、本論では「園林」の語を用いた。中國の園林研究の分野では、近代以前の園林を「古典園林」と総稱する。古典園林を通史的に論じた代表的な著作として、周維權『中國古典園林史(第三版)』(清華大學出版社、二〇〇八年)がある。また、唐代の園林文學・文化に關するまとまった研究としては以下のものがある。侯迺慧『詩情與園境・唐代文人的園林生活』(臺北・東大出版、一九九一年)・李浩『唐代園林別業考論(修訂版)』(西北大學出版社、一九九六年)・同『唐代園林別業考論』(上海古籍出版社、二〇〇五年)・林繼中『唐詩與莊園文化』(瀋江出版社、一九九六年)。

- (2) 古典園林を思想史と連動させて論じた王毅の大著『園林與中國文化』(上海人民出版社、一九九〇年)では、園林を「封建社會において、士大夫が相對的な獨立を得るために生み出された空間」と定義する。本論も、園林の捉え方の基本的な部分において王毅説の影響を受けている。

- (3) 李浩『唐代園林別業考論』(前掲注(1))は第一章に「唐代園林的各種稱謂」を設け、園林の異稱を三十種例示する。

- (4) 唐代の別業に關しては、文獻資料に基づき地域別に分布状況をまとめ

た李浩『唐代園林別業考録』(前掲注(1))がある。

付言しておく、隠逸の場としての大都市中の私邸が、白居易以前には詩に全く詠まれなかったという譯ではない。例えば盛唐・李頎の「題少府監李丞山池(少府監李丞の山池に題す)」は、長安に設けられた「山池」(庭園が付屬した邸宅のこと)をこのように詠う。「能向府亭内、置茲山與林。他人驢驪馬、而我醉羅心。雨止禁門肅、鶯啼官柳深。……窗外王孫草、牀頭中散琴。清風多仰慕、吾亦爾知音(能く府亭の内に向て、茲の山と林とを置く。他人は驢驪の馬なるに、而して我は醉羅の心なり。雨は止まりて禁門は肅たり、鶯は啼きて官柳は深し。……窗外 王孫の草、牀頭 中散の琴。清風 多く仰慕す、吾も亦た爾の知音なり)。また、王維の「春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇(春日裴迪と與に新昌里に過ぎりて呂逸人を訪なうも遇わず)」詩は、都市の住まいを桃源郷に喩える(「桃源一向絶風塵、柳市南頭訪隱淪(桃源一向風塵を絶し、柳市南頭隱淪を訪ぬ)」。これらの作品はいずれも單發的なものであつて、白居易のように大きな流れを作るには至らなかつた。

(5) 作品の編年は韓理洲『陳子昂評傳』(西北大學出版社、一九八七年)に従つた。

(6) 『老子』「不出戸、知天下。不闢牖、見天道(戸を出でずして、天下を知る。牖を開わずして、天道を見る)」。

(7) 李徳裕の平泉詩に關しては、拙論「李徳裕と平泉莊」(『中國文學報』第六十七册、二〇〇四年)でその性質を分析した。

(8) 以下、白居易の詩は平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』(同朋社、一九八九年)の本文を底本とし、那波本による巻數と、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(彙文堂書店、一九六〇年)による四桁の作品番號を付す。詩の制作年代は、朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年)を参照した。

(9) 中唐を境としておこる白居易を中心とした園林空間の轉換については、既に國外に一定の研究の蓄積がある。代表的なものとして、園林空間の「壺中天」化を指摘した王毅『園林與中國文化』(前掲注(2))が挙げられる。また、中唐詩人の「個人領域」に注目するのが、Stephen Owen, *The End of the Chinese Middle Ages*, Stanford University Press, 1996 (中譯:陳引馳・陳磊譯、田曉菲校『中國「中世紀」的終結』生活・讀書・新知 三聯書店、二〇〇六年)である。オウエンは、同書の *Wit and the Private Life* において、中唐におつた private sphere (中譯:私人天地。空間のみならず經驗や活動も含めた呼稱)が初めて生まれた、と主張する。これらの空間は往々にして小さく、また人工を施したものであり、詩人の「解釋(詩作)」によつて本當の意味での所有が可能になる、と言う(同書87頁)。

オウエンが指摘するように、中唐にはそれまでと異なる形での私的空間が生まれたのは事實であり、本論もその變化に着目することを出發點としている。しかし本論では、第二章に展開するように、韓愈や白居易以前にも、「個人の所有する・個人の感慨を表白する空間」は存在した、と言う立場を取る。オウエンは、中唐以前の隱逸の場を、「所有も限定もされない空間」、「こちら」と「あちら」ということでしか境目が無い空間」であるとす。しかし、唐代の士大夫たちが、自身の故郷や長安・洛陽周邊に別墅や別業を所有し、そこに擬似的隱逸や精神の解放を求めていたことは、第二章に指摘するところである。

なお、オウエンの該書の内容のうち、特に「私人空間」「微型園林」に注目した書評として、李浩「微型自然、私人天地與唐代文學詮釋的空間」(『文學評論』二〇〇七年第六期)がある。また、オウエンの説を承けて、中唐から北宋の「Private Sphere」を研究した專著として Xiaoshan Yang, *Metamorphosis of the Private Sphere*, Harvard University Asia

Center, 2003 (中譯『私人領域的變形』、江蘇人民出版社、二〇〇九年)がある。

(10) 『終南山の變容』、研文出版、一九九九年所収。同論文では、従来の長安を描いた文學として、「帝都を稱揚する文學の系譜」(『文選』の京都を詠じる賦や、樂府の「帝京篇」「長安道」など)と、「京都の繁華に反發し、それとは別の生き方を希求する」作品の二つの系統を提示している。

(11) 川合氏の論文では、同じく大都會長安に鋭敏に反應した詩人として韓愈と孟郊を挙げ、韓愈は古の世界に己の道を見出し、また孟郊は、自己の内部に沈潜していただけだった、と指摘する。孟郊は自身の「居」を表現することに熱心ではあったが、孟郊の描く「居」は言志の文學の流れを汲む觀念的なものである。

(12) 妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」(『白居易研究年報』第一冊、勉誠社、一九九三年)は、白居易詩文を材料として當時の長安・洛陽の街並み、白居易の友人たちの居住状況を復元する。本論での白居易の居室に関する記述は、妹尾氏の研究に據った。

(13) 『東洋史研究』五五―二、一九九六年。

(14) 妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」(前掲注(12))にも同様の記述が見える。また同文は「中唐の兩京の都市文化が、單に白居易の詩の題材となるのみならず、白居易の詩の創作活動自體を促す重要な要素となっていた」と指摘される。

(15) 唐代の園林藝術の諸相に關しては、前掲注(1)で挙げた周維權・侯迺慧・李浩の書を参照。また、注(9)で述べたように、王毅『園林與中國文化』は、中唐を園林の轉機と位置づける。同書では、中唐以降の園林がもつ空間の性質を「壺中天地」(限られた小空間の中に、豊富な内實をもつ場所を構築する)と呼び(同書第一編第六章など参照)、白居易はその

園林の「小空間」

最も重要な擔い手の一人であるとする。これを受けて、白居易の閑居における「小空間」嗜好に注目し、その詩文における「窓中の竹」「小池」の意義を取り上げた先行研究に、赤井益久「白詩風景考」(『中唐詩壇の研究』、創文社、二〇〇四年)第II部第四章がある。

(16) 川合康三「韓愈と白居易」に指摘される(『終南山の變容』、研文出版、一九九九年所収)。

(17) 白居易の居室表現と身心の適・不適を結びつけて考察した先行研究に、埋田重夫氏の一連の研究(『白居易研究・閑適の詩想』、汲古書院、二〇〇六年所収)がある。埋田氏は、白居易の居室は「人間の身體そのものに連続している」空間である、という見方を提示し、「庭園とは、自分の身體の延長線上に確立されたもう一つの自己自身にほかならない」と指摘される。身體化された空間という見方は、本論で後に指摘する「小空間」の親密なあり方とも深く関わっている。

(18) 赤井益久氏は、仕隱の矛盾を心のあり方によって解消する發想の先驅者として、韋應物との繼承關係を指摘される。氏によると、韋應物は「心の持ち方、精神のあり方しだい」で閑居を實現させ、「處世觀の對立を越えた精神世界のありかとしての「閑居」を提示した(『中唐詩壇の研究』、創文社、二〇〇四年、第II部第三章)。白居易においては、「處世觀の對立を越える」ことが、官僚生活の初期から、大きな葛藤の痕跡もなく行われているように見える。

(19) 拙論「池上篇并序論」(『中國文學報』第七十三冊)では、白居易が江州で友人に書いた手紙の中で、「自身の好むもの、大切なものが全て目の前にある」ことを自適の根據として繰り返して挙げていることを指摘した。

(20) 『莊子』逍遙遊「鶴鶴巢於深林、不過一枝(鶴鶴深林に巢くうも、一枝に過ぎず)」。

- (21) 『三國志』卷五十四・周瑜傳「瑜上疏曰、劉備以梟雄之姿、而有關羽・張飛熊虎之將、必非久屈爲人用者。……今猥割土地以資業之、聚此三人、俱在疆場、恐蛟龍得雲雨、終非池中物也、(瑜上疏して曰く、劉備は梟雄の姿を以てし、關羽・張飛の熊虎の將有り、必ずや久しく屈して人に用いらるる者に非ざるなり。……今猥りに土地を割きて以て之を資業し、此の三人を聚め、俱に疆場に在らしめば、恐らくは蛟龍雲雨を得、終に池中の物に非ざるならん)」。
- (22) 序文に、「大和三年夏、樂天始得請爲太子賓客、分秩於洛下、息躬於池上。凡三任所得、四人所與、泊吾不才身、今率爲池中物矣。(大和三年夏、樂天始めて請いて太子賓客と爲るを得たり、秩を洛下に分ち、躬を池上に息ましむ。凡そ三たびの任の得る所、四人の與うる所、泊び吾が不才の身は、今率く池中の物と爲れり)」とある。
- (23) 「小園賦」は庾信が北朝に移つて間もなくの時期に書かれたとされる。作品は庾信の住まい(「小園」)を主題とし、更に自身の前半生にも言及する。前半の住まいの描寫の箇所では、自身が持つ「數畝の弊廬」を、巢父が安住する枝の上、壺公が身を容れる壺などに喩える。白居易と同じく外界を拒絶した閉ざされた住まいを描くものではあるが、庾信の「小園」は自身の不如意なあり方を反映し、山中の隱者のすみか、自己が沈潜する場所として描かれている。
- (24) 白居易の個人空間を考える際に重要な江州廬山草堂については、行論の都合上、十分に觸れることができなかった。草堂は、洛陽の履道里邸と全く異なる状況・環境下で造られたにも関わらず、履道里邸と様々な共通点を示す。埋田氏の研究(前掲(17))が指摘するように、廬山草堂は履道里邸の閑適世界の一種の原型であると考へて良い。しかし、草堂には洛陽履道里邸のように外界を敢えて無視するような態度は見られない。